

2017年度 募集要項 インド ニッテ大学派遣プログラム

いざ行かん！
インド留学で見つける新しいワタシ



[募集対象] 理工学部1～3回生、生命科学部1～3回生
[応募期間] 2017年3月30日(木)～4月18日(火)17時
[選考結果発表] 5月19日(金)17時に CAMPUS WEB で通知

1.プログラムの概要・目的

本プログラムは、インドの科学技術や文化等の理解を深めながら、インドが抱えている様々な課題について調査を行い、課題に対して理工系の知識を活かしながら、様々な視点で解決策を探ります。また、解決策の効果や実現性等についてディスカッションを行い、検討を重ねることで、科学技術の理解を深めます。

現地研修では「ニッテ大学 NMAMIT」に訪問し、現地の学生とのディスカッションや研究室訪問、フィールドワークなどを通じて解決策の検証を行い、最終プレゼンテーションを行います。

本プログラムの主な目的は以下の3点です。

インドにおける課題へのアプローチと解決策の検討

インドにおける課題に対して、現地でのヒアリングや企業訪問等を通して、その解決策を検討する。現場の技術者から話を聞くことで、日印の科学技術を比較し、それぞれの科学技術の可能性や課題等に関して理解を深める。

英語でのコミュニケーション能力の向上

グループワークやフィールドワーク等を通じて、コミュニケーションの手段として英語を用い、意思の疎通をはかることで、英語でのコミュニケーション能力の向上を図る。

異文化理解

派遣先大学において、多様な背景の学生たちと共同で生活し、学び、意見を交わし、発表することを通して、文化・習慣等の違いや共通点を見出し、相互理解の重要性を学ぶ。

2.プログラムのスケジュール

本プログラムは以下3つのセクションに分かれています。

A：事前講義・現地研修に向けた準備、B：現地研修（移動日含め10日間）、C：振り返りとまとめ

本プログラムの担当は、廣瀬幸弘教授です。

	日程	時限(理系)	内容
A	11月上旬	別途調整 1	授業の進め方、課題解決の手法に関する講義
	11月下旬		インドにおける課題について、調査報告とディスカッション
	12月中旬		インドの現状の理解（IITH学生との懇談）
	1月上旬		解決策（方向性）のプレゼンテーションとディスカッション
	1月31日(火)	11-12 時限	渡航前ガイダンス
B	2月中 (10日間程度) 2	-	[派遣先大学] ニッテ大学 NAMAIT (Nitte Mahalinga Adyanthaya Memorial Institute of Technology) [現地研修内容] ・ A brief on Nitte University ・ Lab tour ・ Workshop with Nitte students ・ Visit to laboratory ・ Visit to industry ・ Outing with Nitte students ・ Final presentations
C	2月下旬	別途調整 1	現地研修を受けたまとめ、発表

1 本プログラムの参加者が決まった後に、参加者の授業時間割を考慮して決定します。

2 現地研修の日程は変更になる可能性があります。また、追試験日と重なる可能性があります。本プログラムに参加して追試験を欠席したとしても、配慮はされません。

3. プログラムで目指す到達目標

- ・インドにおける課題に対し、グループで協力して解決策を検討し、まとめることができる。
- ・インド人学生と、英語でコミュニケーションをとり、プレゼンテーションにおいて、英語で分かりやすく提案を説明することができる。
- ・インドの多様な文化、社会的状況、科学技術等に関して理解を深め、それらについて説明することができる。

4. 募集定員

10名程度

5. 応募資格

- (a) 理工学部1～3回生、生命科学部1～3回生であること。国籍は問いません。
- (b) TOEIC®テスト400点以上、TOEFL®BTテスト435点以上、TOEFLiBT®テスト41点以上のいずれかの要件を満たすこと。
- (c) 将来、国際的なフィールドで活躍したいという強い動機、意欲を有すること。

6. 費用

- (1) 大学負担費用
 - a) 渡航費（日本 - インド往復航空運賃7万円/人まで大学負担）
 - b) 現地での宿泊費（ニッテ大学 NMAMIT の寮に宿泊します）
- (2) 参加者負担費用（約6万円）
 - a) 渡航費（一部負担。4万円程度）
 - b) ビザ取得費
 - c) 海外旅行保険料（海外旅行保険料には必ず加入いただきます）
 - d) インド渡航時の国内交通費（自宅 - 関西空港間など）
 - e) インドでの食費・移動費下記「11. 奨学金」の受給者は6万円支給されるため、参加費用は実質「無料」になります。

7. 単位授与

本プログラムを終了した学生に授与される単位は以下のとおりです。後期セメスターに授与します。

学部/研究科	科目名	科目分野	単位数
理工学部	特殊講義（基礎専門）	基礎専門	2単位
生命科学部	特殊講義（専門基礎）	専門基礎	2単位

8. 応募方法

- (1) 応募期間など
 - ・応募期間：3月30日（木）～4月18日（火）17時まで
 - ・提出方法：窓口持参またはメール送信
 - ・提出先：理工学部事務室
メールアドレス：reinvent@st.ritsumeai.ac.jp

(2) 提出書類(エントリーシート)

募集ガイダンス(3月30日、4月6日、4月11日)で配布される書式、または下記ホームページの添付ファイルをお使いください。

【立命館大学 世界展開力強化事業ホームページ】

「トップページ」「NEW/アップデート」から「2017年度ニッテ大学派遣プログラムの募集を開始しました」を参照してください。

[URL] <http://www.ritsumei.ac.jp/reinventindia/>

(3) 選考方法

書類審査および面接を行います。面接が必要な方には別途連絡します。

9. 選考結果発表

5月19日(金)17時にCAMPUS WEBの「個人通知」のお知らせで通知します。

10. 受講登録

受講登録は事務室で行います(自身での登録は不要です)。年間受講登録制限外科目です。

11. 奨学金

JASSO(日本学生支援機構)の指定する所定の要件(成績基準と家計基準)を満たした学生には、奨学金(6万円)を支給します。JASSO奨学金の支給要件は以下のとおりです。

【JASSO奨学金支給要件】

以下の計算式で求められる2016年度の成績評価係数が2.30以上であること。

[成績評価係数の算出方法例]

下記の表により「成績評価ポイント」に換算し、計算式に当てはめて算出(小数点第3位を四捨五入)

4段階評価(パターン1)	成績評価				
	—	優	良	可	不可
4段階評価(パターン2)	—	A	B	C	F
4段階評価(パターン3)	—	100~80点	79~70点	69~60点	59点以下
5段階評価(パターン4)	100~90点	89~80点	79~70点	69~60点	59点以下
5段階評価(パターン5)	S	A	B	C	F
5段階評価(パターン6)	A	B	C	D	F
成績評価ポイント	3	3	2	1	0

(計算式)

$$\frac{(\text{評価ポイント3の単位数} \times 3) + (\text{評価ポイント2の単位数} \times 2) + (\text{評価ポイント1の単位数} \times 1) + (\text{評価ポイント0の単位数} \times 0)}{\text{総登録単位数}}$$

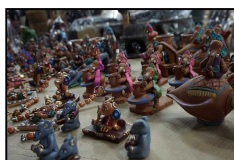
以下の家計基準を満たしていること。ただし、以下の基準を満たさない場合でも、個別の事情(兄弟が私立大学に在学している等)があれば基準を満たしたものと扱われる場合があるので、理工学部事務室に相談してください。

[学部生] ・ 給与所得世帯：955万円未満 ・ 給与所得以外の世帯：469万円未満

ニッテ大学 NMAMIT について

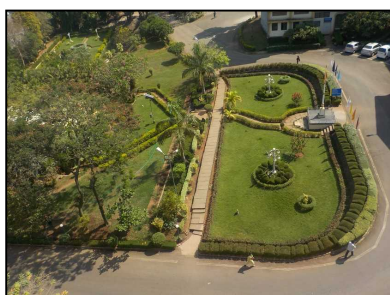
インド国内のトップレベルの総合大学！

ニッテ大学 NMAMIT は、インド国内でもトップレベルの大学で、電子通信工学、コンピューター科学工学、土木工学、電気電子工学、情報科学工学、機械工学など多くのコースがあり、学生数 14,000 名ほどの総合大学で、インド南部のカルナータカ地域にあります。



理工学部と様々な学生交流プログラムを実施

2016 年度は、本プログラムに 13 名の理工学部生が参加し、4.5 名のチームをつくり、全 3 チームがインドにおける課題へのアプローチと解決策の検討を行いました。テーマは「交通問題」または「電力供給」です。2 月のインド現地で調査を進め、現地でのヒアリングや企業訪問等を通して、その解決策を検討しました。また、12 月にニッテ大学の学生が本学に来校したときには、学生サポーターとして、活躍し、京都フィールドワークなど様々な企画でコミュニケーションをとり、交流を深めました。



2015 年 12 月に、理工学部でニッテ大学 NMAMIT の学生・大学院生・教員を 11 名受け入れ、日本における環境技術（水処理技術、排ガス処理技術、廃棄物処理技術など）やそのシステムを学び、インドにおける環境問題を考える「学生交流プログラム」を実施しました。

本学の学生はサポーターとして参加し、キャンパス案内や施設見学、研究室見学などにおいて英語でコミュニケーションをとり、日印の科学技術や互いの文化の違いについて語り合いました。

